

114
A 3528

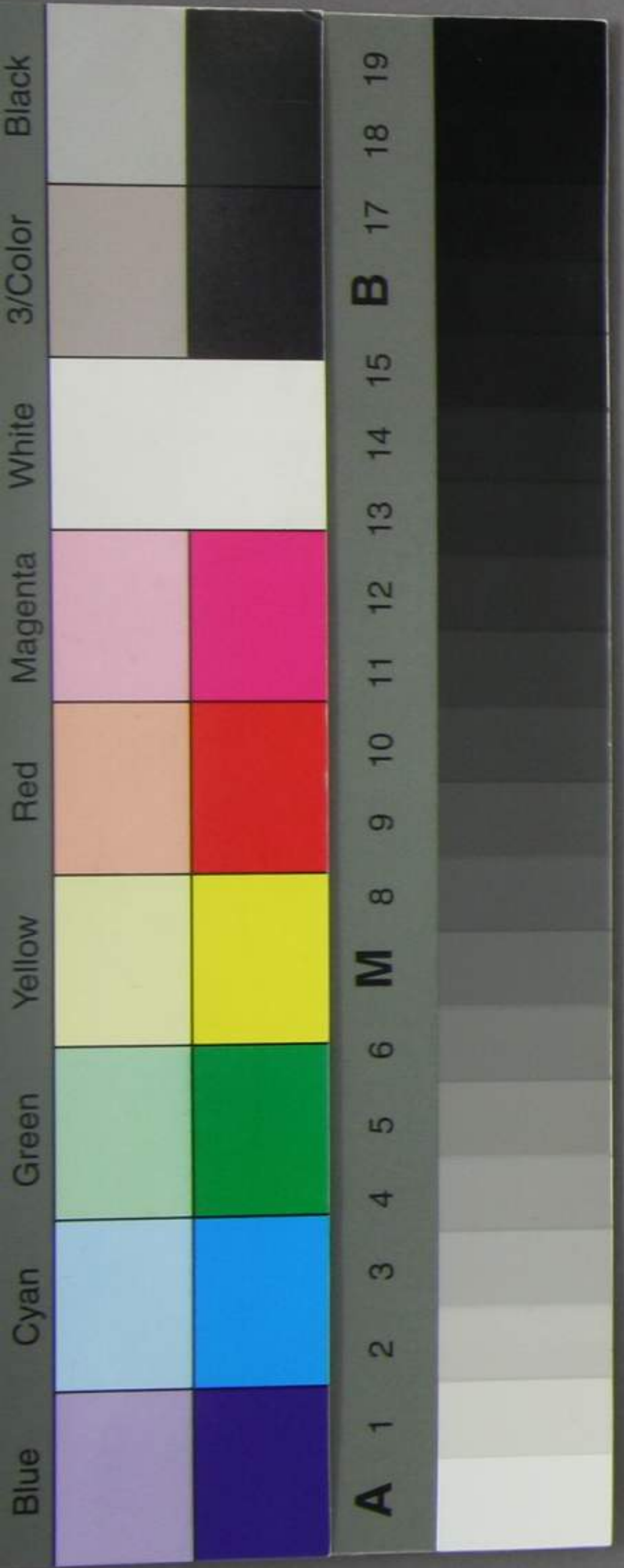


中央ノ市街、防火線路ヲ設ケ其家屋ノ構
造制限ヲ定メラレタルハ火災豫防ニ為テ必要ノ事
ナリト雖モ猶ラ目下市中ノ現況ニ就テ之レヲ觀
察スレバ此脚布達ノ果シテ實際ニ行ハレテ各線
路ノ家屋期ノ如ク整理改良シ得ルハ真ニ至難
ノ件タルヘシ何者近來物價騰貴融通氾濫
シテ金利モ亦非常ニ引上ケタル時ニ際シ府下ノ
高估ハ縱令家屋修繕ノ工キモ猶其營業資
本ニ苦ム。情ナキ能ハス況マ昨年来ノ火災

大正十一年四月
大正十一年四月
大正十一年四月

東京市街防火線路

一



ニ罹リクル者ノ如キハ通常家屋ノ工夫ヲモ難ニ
スルノ場合ニ於テ殊ニ甘途外ノ任費ヲ要スル詳
ナルニ付到底種々ノ苦情ヲ來サシ甚シキハ然嗟ハ
聲街衢ニ滿シモ亦知ル可ラス然リト雖氏之ヲ顧
慮シテ其施設ヲ遷延セハ終ニ改良ノ日ナキニ至
ラシ是レ令般ノ脚布達アル所以ナリ然則今
日此難事ヲ處シテ而シテ其成功ヲ期セント欲
セハ自ラ他ニ之ヲ保護スルノ間接方法ヲ求メ
ルヘカラス私共賤劣ト云ヒ永ク當府下ニ住シテ久
シク市政ノ餘澤ヲ受ケ常ニ火災ノ防カサル可

ラサルヲ知リテ只其方法ノ施シ難キニ苦シム是レ
於テ共ニ相謀テ債家會社ノ創設ヲ企圖スルト
雖氏其計算ノ相償ハサルノミナラス其方法モ亦
以テ今日ニ適應セサル所アルヲ覺フ因テ翻案
再思シテ茲ニ家屋抵當債金方法ヲ擬設
シ其甲乙二法ヲ案定セシニ付敢テ閣下ニ呈
シテ奉煩電普候モシ此早考採ルヘキアリトシ
テ更ニ脚推問ヲ蒙ルハ光榮ヲ得ルニ於テハ猶詳
細具陳可仕奉存候謹言

明治十四年四月一日

某等再拜

東京府知事松田道之殿

方案要旨

火災豫防ノ為メ家屋構造法ノ間接保護ヲ防
火区内全般ニ普及セシムルハ至難ノ事ナルニ付
漸次之レヲ擴伸スルノ目的ヲ以テ先ツ防火線路ニ
限リ見込ヲ立ツ可シ
此防火線路ニ就テ貸家會社ヲ創立シ完全ノ家
屋ヲ新築シテ望ムニ貸与スルハ將來ニ期スル所ナ
リト云目今或ハ未タ習俗ニ應セサルアルト殊ニ其計
算ノ當ルヘカラサルニ付暫ク家屋抵當貸金方法
ヲ施設シ漸ク以テ其目的ヲ達スルニ至ル可シ

貸金ヲ要スル高ハ防火線路二十二線ノ長延六千九百六十二間ノ中路及他ノ路ノ十分ノ二ヲ列去リ五千五百六十九間余トナル而シテ此建築ヲ履行五間〔五分〕四間〔四分〕三間〔三分〕ト見積リ総坪數貳方千六百六十四坪餘ノ處自費建築ト後來存在スル土藏造ケラニ割列トシテ残坪數壹万六千九百三十一坪餘之レヲ上等建築代巻坪ニ付金百貳十圓〔十分〕圓〔十分〕中等建築代巻坪ニ付金百貳十圓〔十分〕トシテ總經費金貳百十三万三千三百圓餘此内九分金ヲ貸與スルモトシテ此金額百九十二万圓餘

トス

故ニ前條ノ目的ヲ以テ此貸金方法ヲ施設スルニハ其資本額概算貳百万圓ヲ要ス可シ然リト云凡若シ其貸金割合ヲ減少シテ七分金ヲ貸与スルモノトセバ資本額百五十万圓ニテモ此施設ヲ得可シ是レ甲乙二案ノ因ラ生スル所ナリ
甲乙共ニ此方法施設ノ基本ハ均シク公債証券ニ拠ルモノニシテ只其資本額ニ大ナルヲ以テ貸金割合及其利益ニ差等ヲ設クルノミ
甲ノ會社於テノ貸付金ハ九分金〔建築費〕ヲ以

ラシ其利息ハ年五分ト定メ乙ノ會社ニ於テノ貸
付金六七分金（建簿通）ヲ以テ其利息ハ年六
分ト定メ其元金ハ何レモ貸付ケタル年ヨリ滿三ヶ
年据置キ四ヶ年目ヨリ向テ滿七ヶ年ニ割合年
賦返入セシムルモノトス

十ヶ年ヲ経テ滿期ニ至レハ兩方トモ之ヲ約變シ
ラ始メテ真成ノ貸家會社ヲ創立スベキノ目
的ナリ

然リト云氏此會社設立ニ付（甲乙共）付与セラルノ
特典ハ貸家會社ニ改業セル后モ尚十ヶ年永

續スルヲ要ス是レ貸家會社ノ得失ニ於テ未ダ
充分ノ見込ヲ得サレナリ

甲ノ方法ニ據ルモノハ七分利付金祿公債額面（他）
ニテモ利息ノ公平ノ割合ヲ三百方圓ヲ以テ成立ス之レノ抵
當トシテ金貳百万圓ヲ年二分ノ利息ニテ二十ヶ年

間貸与セラルヘシ故ニ其資本総額ハ貳百万円ト
稱ス可シ

乙ノ方法ニ據ルモノハ七分利付金祿公債額面二百
万圓ヲ以テ成立ス之レヲ抵當トシテ金百五十万圓ヲ
年四分ノ利息ニテ二十ヶ年間貸與セラルヘシ故ニ其

資本係額ハ百五十万圓ト稱ス可シ

両方法共ニ資金貸出方ハ防火線路ノ店セ蔵抵
當ニ限リテ他ニ營業ヲ為スハカサルモノトス然レトモ
既ニ貸付タル者ノ年賦返金トナリタル内及ヒ各種ノ
積立金等ノ類ハ或ハ防火区内ニアル店セ蔵ヲ限
リテ抵當貸付ヲ為シ一般制限ノ一又ハ公債証券ヲ
買入ル事ナル可シ

両方法トモニ營業中ノ検査ハ府廳ノ定ル所ニ
従テ之ヲ受ク可シ

両方法トモニ其株主ノ間ニ於テハ創立ノ際ニ先ツ

豫約ヲ立テ毎年兩季毎勤定報告ノ際ニ全体

ノ收益金ヨリ營業ニ屬スル諸経費（并借金ノ利息）

ヲ引去リ真ノ實ノ純益金ヨリシテ其株高ナル公債

証券ノ利息ヲ配當スルホテ止メ他ニ剩餘ノ利益

アルモ都テ之ヲ各種ノ積金トナシ置キ満期ニ至リ

此蓄積ノ利益金増殖シテ貸家會社ノ創立

ニ便宜ヲ存スルヲ豫謀スヘシ

右ノ要旨ニ拠リテ甲乙二法ニ計算ヲ按スル

左ノ如シ

甲

資本金総額貳百万圓也

此譯

七厘利付金種公債三百万圓 株主より募集高

右、金種公債証書の抵當トシテ（額面百圓、白六十六）

通貸貳百万圓ヲ年二分ノ利付置据持借ヲ

為シ之ヲ以テ家屋抵當貸付營業ヲ為スノ

見込

此貸付金額貳百万圓ヲ十年平均ニ特別

制限利息貸金ヲ百万圓一般制限利息

貸付金ヲ九十万圓ト見積リ一十年ノ損益ヲ

按算スルニ左ノ割合ヲ得ル

一金五万五千圓也

特別制限利息貸付金利息

一金十万八千圓也

是收入高但年五歩ノ割合

合計金十六万三千圓也

内

一金壹万五千圓也

會社役員給料其他

一金四万圓也

準備金二百万圓、利息

一金六万圓也

滞貸準備

一金壹万貳千圓也

但貸付高平均高百分三見換

小以金十二万七千圓也

役員賞与及臨時費用

差引

純益金三万六千五百円也

積立金

外に公債証券、利息及當籤、利益ハ其
株主ニ配當ノ積リ

吾ノ計算ハ十七年平均ノ見積リヲ以テ試ニ一年
分ヲ仕出シタルモノナレハ多少ノ差違ヲ生ズルハ免ルカ
ラストモ此ニ要スルニ十七年ヲ經テ純益総額三十五万
圓餘ノ蓄積ヲ得可シ是ニ於テ始メテ此利益ヲ
本額ニ加ヘテ債家會社ニ改業スルノ見込ナリ

乙

資本総額百五十万円也

此譯

七半利付金祿公債劔百万圓也

株主ヨリ募集高

右ノ金祿公債証券ヲ抵當トシテ

(額面百万圓ニ付)通

貸百五十万円ヲ一年四歩ノ利付置拵
採借ヲ為シテ貸付營業ヲ為スノ見込

此貸付金額百五十万円ヲ十年ニ平均シ特別
制限利息貸付金ヲ八十万圓一般制限利息
貸付金ヲ七十万円ト見積リ一年分ノ損益
ヲ按算スルニ左ノ割合ヲ得ル

一金四百八千圓也

一金八万四千圓也

合計金十三万五千圓也

内

一 九金壹万内也

一 九金六万内也

一 九金貳万貳千五百圓也

一 九金七千五百圓也

小以金拾万圓也

差引

特別制限利息貸付金利
是收入高但年六歩、割
一般制限利息貸付金利
是收入高但年五歩、割

會社役員給料其
他營業諸費

株借金利息

滞債準備

貸付平均高、百分二五

後償費及臨時費用
見積り

純益金三万貳千圓也

外、公債証書利息及當籤利益等ハ其儘

株主へ配當ノ積り

右ノ計算ハ十年平均ノ見積リ以テ試ニ十年

分リ仕出シタルモノナレハ多少ノ差違ニ由ルル免ルハ

カラスト虽必要スルレ十年ヲ経テ純益総額三十万

圓以上ヲ蓄積スルヲ得可シ是ニ於テ然ラテ此利

益ヲ本額ニ加ヘテ真成ノ貸家會社ヲ創立スル

ノ見込ナリ

